

令和6年度 学校関係者評価書(様式)

鈴鹿市立河曲小学校		NO. 1		
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
学 力 向 上 × I C T 活 用	○校内研修の充実を図る。 ・3・4・5年生の算数科の授業(週5時間)で少人数指導(習熟度別学習、TT)を実施し、学力の定着と向上を図る。 ・全国学力・学習状況調査や「みえスタディ・チェック」の結果を踏まえ、課題を改善するために効果的な授業実践を行う。 ・教育委員会から指導主事を要請する全校及び学年別研修会(年3回以上)。 ○基礎学力向上への取組 ・河曲っ子タイム(朝学習)を1、2年生は毎朝、3年生以上は週2回(月・水)実施し、学力の定着を図る。 ・スペシャルサマーを実施し、1学期の算数科の基礎学力定着を図る。 ・活字に親しみ、読解力の向上を図るために、「子ども新聞」を活用する。 (4年以上の各学級へ配紙) ・読書貯金を全学年で行い、貸出冊数の1人あたりの平均を増やす。 ○家庭学習の定着に向けた取組 ・目標をもって意欲的に宿題に取り組めるように、家庭学習強化週間を年3回設ける。「家庭学習の手引き」をもとにした家庭と連携した取組(「家庭学習カレンダー」の活用) ○ICT活用 ・オクリンクプラスを活用した主体的な学びを促す授業づくり ・ドリルパークを活用した個別最適な学びを実施する。	○少人数指導により、苦手な児童にとっても自分に合ったペースで学習することができ、とても有効だった。 ○全国学力・状況調査等の分析を行うことで、2学期以降の授業改善につなげた。漢字に関する問題の正答率が低かったため、ICT機器(ドリルパーク)を活用した取り組みを全校で実施した。 ○指導主事を要請する研究授業を年3回行った。(研究授業は年7回) ○スペシャルサマーは2日間で256人の児童が参加した。(3年生以上) ▲読書量が、一人当たりの年間貸出冊数が、36冊になり、昨年より減少している。(昨年度は、37冊) ○家庭学習強化週間は年3回実施した。取り組みの様子や振り返りを通信を使って保護者へ知らせている。 ▲河曲っ子タイムに行っている読む書くワークの負担が大きい。 ○異学年交流を活用した学習。6年生が2年生の九九チェックを行った。3年生が1年生におすすめ本の読み聞かせを行った。	・令和6年度の全国学力・調査状況調査、みえスタディ・チェックの結果は全国平均や県平均を上回る結果となりすばらしかった。引き続き学力向上に向けた取組を行っていただきたい。 ・全国学力テストが平均点を上回り、すばらしいことです。平均点以下だったテストの成績が上がったのは、先生方の教へのたまのと思えます。 ・学力テストにおいて成績が上昇傾向にあるので、引継ぎ取組を継続願いたい。特に学力別(習熟度)の少人数教育は非常に良い。 ・少人数指導によってよい効果が表れているのはよかったと思う。引き続き取り組んでいただきたい。できれば低学年も。 ・河曲っ子タイムの負担が大きいとあるが誰の負担になっているのか。子ども新聞の活用方法とは、どう活用したか、読解力は向上したのを知りたい。 ・家庭での学習は基本。保護者アンケートでも半数以上が進んで学習を行っているとのこと。強化期間は年3回では少ない。毎月強化週間を設けてもいいのでは。 ・読書量は今一番必要だと思う。読む理解度が向上しないと、テストの問題が理解できない。読書時間を増やす対策が必要。 ・読書量について、貸出冊数でみれば1冊/週を借りて、河曲っ子タイム等で1週間かけて読んでみてはどうか。月4冊×11ヶ月(夏休み除く)とすれば、40冊/人となる。 ・読書量が一人当たりの年間貸出数が減少しているデータがあり、平均数(児童数に対し)と考えられるが多い子は多く、少ない子は年間どのくらい貸し出しを利用しているのか。 ・本読みは全ての基本となるので、本を読む機会をどの様に増やすのかを検討することが必要。算数の応用問題や国語の長文問題、作文能力の低下など、原因は読解力だと思う。 ・ICTを活用する時代となり、書くことが減ることを心配している。書く力を養う事を引き続き続けてほしい。 ・ドリルパークの進み具合は先生が一人ひとりのものをチェックできているのだろうか。	・次年度も引き続き算数科の授業で少人数指導(習熟度別学習、TT)を実施し、個別にあった授業を行う。 ・全国学力・学習状況調査の分析を行い、河曲小学校の強みと弱みを分析する。分析結果を授業改善に生かす。 ・図書委員会を中心に、本の貸し出し冊数を増加させる取り組みを行う。 ・読書量を増やすために、朝の会や給食後など、読書に取り組む時間を設定する。 ・今後も引き続き、家庭学習の手引きや家庭学習カレンダーを活用し、家庭学習の意義を保護者に啓発する。また、読書強化週間などを実施して、家庭での読書も増やしていく。
	○不適応、不登校(傾向)児童への支援 ・不登校対策コーディネーター、特別支援教育コーディネーターを中心として確立された校内体制を維持推進する。 ・SLS(週3日)、SC(年間19回)、SSW(年間8回)や関係機関と情報を共有し連携した支援の実施。 ・特別支援教育推進委員会を月1回開催し、困り感のある児童や保護者の状況を共有するとともに、改善に向けた対応策を検討する。 ・登校に不安のある児童に対しては「ほっとルーム」を紹介し、不安の軽減につなげる。 ・不登校傾向児童(ほっとルーム利用児童)の情報の共有(毎日:ほっとルーム担当、SLS、養護、特別支援Co、不登校Co、担任、管理職)	○SLS(週3回)、SC(年間19回)、SSW(年間8回)を積極的に活用し、不登校児童や困り感のある児童、保護者の支援を行った。必要に応じて情報共有を行った。 ○年8回の特別支援教育推進委員会を実施し、困り感のある児童や保護者の情報共有し、支援の方法について話し合った。記録を全職員で共有した。 ○「ほっとルーム」通室児童の様子を、ほっとルーム担当、SLS、養護、CO、担任、管理職で記録し、細かな情報共有や手立ての相談をした。 ○緊急性がある場合やチームでの対応が必要な児童については「ケース会議」を開き、必要な情報共有を行い、家庭環境等を考慮しながら対応を話し合うことができた。 ▲教室に入りづらい児童すべてをほっとルームに受け入れてしまうと、ほっとルーム運営や教室に戻るきっかけづくりに影響がでるので、慎重に利用許可を出す必要がある。 ▲居場所の約束(ほっとルーム・保健室)を明確にし、どの児童にも共通した約束を提示できるようにした。しかし個々によって、家庭環境や不登校背景、性格など状況が様々であるので、ルールだけで動くのではなく、柔軟な対応をとる必要がある。児童のためにすばき支援、学校として対応可能かをその都度校内で話し合う必要があり、模索し続ける必要がある。	・長期欠席対策については個人情報保護の関連もあり、状況が理解できない。また、専門的な知識が必要であることから、関係機関と連携を強化する取組を今後も続けていきたい。 ・課題の通り柔軟な対応と支援、話し合いで模索し、対象児童にとって最善策を講じていく事が重要と思う。支援してくださっている方に感謝します。 ・不登校の問題に特効薬はない。一人ひとり違うので、とにかく子どもとの話し合い、コミュニケーションが大事。とりえず、学校に行かせる。 ・不登校や登校拒否等、各々の児童での原因は様々であると考えられるが、各々の原因対策はどのように取っているのか。一方、メディアや学識経験者は無理に登校させなくてもよいと言っているが、学校側としての判断はどうなるのか。 ・不登校の教室へ入りづらい子の状況は、それぞれ違うと思うので対応が大変そう。先生たちの負担が増えるのが心配である。 ・一人でも不登校児童が減るように、引き続きでの努力をお願いします。 ・担任一人で対応するには、業務ボリュームが大きすぎるため、適正な人員配置を求めていく必要がある。 ・不登校児童にはそれぞれの問題があると思う。運営協議会でも一度考えて話し合ってみてはどうか。 ・教室に戻るきっかけにPTAや運営協議会で何かできることはないだろうか。(接し方に注意しないといけないという不安があるが)	・不登校の支援には、ある程度の関係づくりが必要である。そのため、一定の期間、学校に来て関係づくりをしてもらう必要がある。キーになる人を増やしていくことはその子の負担になることが多い可能性がある。理解していただき、配慮して下さることは感謝します。 ・不登校や登校拒否等の対策について、学校側としての意見はその子の状態によって、学校に来させるのか、心を休ませる時間をとるのかということとを判断していく必要がある。ただ休ませることだけでなく、担任が電話連絡や家庭訪問をして、積極的につながっていく必要がある。 ・適正な人員配置を求めていく。 ・引き続き関係機関と連携して、個への支援方法や対策を模索していく。 ・学校側で対応できないところは、病院・SC・子ども家庭支援課・けやき教室などにお願いをしているところである。 ・原因追及していくことよりも(原因がいじめである以外)、その子に合う支援の方法や支援体制について、そしてこれからについて考えていくことに重きを置いていきたい。
	1 学校運営協議会での協議に基づく学校運営の改善・充実 ・年6回開催し、学校、地域の実情に応じた協議の充実を図る。 ・中学校区での取組を推進する。(挨拶運動、家庭学習週間) 2 保護者、地域への積極的な情報発信 ・運営協議会での協議内容を学校HP、学校だより等で定期的に発信する。 ・学校公開デー(ラジオ体操、フリー参観、運動会等)を設定し、地域とともにある学校づくりを推進する。 3 学校教育活動への地域人材の積極的な活用 ・地域コーディネーターと連携し、円滑な支援を行う。(ボランティア活動のべ1000人) ・感染防止対策をとった上で、学校支援ボランティアやゲストティーチャーの活用を図る。 ・地域づくり協議会と連携した学校環境美化活動の実施(年間4回)	○学校運営協議会を6回開催し、「私たちの地区のいいところ」ポスターコンクールの取組や、バザー実施のための熟慮や準備運営を行った。 ○挨拶運動に加え、校区で家庭学習週間を3回設定した。 ○校区の課題について協議する、中学校区学校運営協議会を1月に開催した。 ○学校公開デーは体育館改築工事のため、参観者を地区別に分けたりして実施内容を工夫して行った。ラジオ体操は2回実施し、のべ500人以上の参加を得た。 ○校外学習時の引率ボランティアなど、保護者にたくさん協力していただいた。 ○PTAとも協働した学校環境美化活動を4回実施することができた。 ▲学習支援ボランティア(家庭科ミシン、習字、算数九九 等)の参加の充実を図りたい。	・地域連携の取組は非常にうまくいっていると思う。あいさつ運動など日々の取組の積み重ねが大切だと思う。保護者、学校、地域が一体となった取組も今後も進めていきたい。 ・昨年の夏休みに行った「私たちの地区のいいところ」ポスターは、すばらしい作品が多く、児童にいいきっかけづくりができた。山辺地区は初集会(自治会総会)の場で、披露した。PTAの提案した課題がよかったと思います。 ・夏休みのポスターコンクールは地域や学校を考える良い機会と思うので、来年度も継続して企画してほしいと思う。ラジオ体操は夏休みに実施しない地区があり、休み中の早寝早起き良い機会になるので継続してほしい。 ・地域の方々とのラジオ体操、バザー開催で交流を図れた。ポスターコンクールも地区の特色を描いて大変良かった。 ・河曲地区独自の取組があるのがよいと思うので、このまま続けていきたい。 ・地域づくり協議会と連携した清掃活動は今後もさらに児童を含めて広げていければいい。 ・校舎内外の環境整備について学校支援ボランティアへのお願いしたいことがあれば発信してほしい。蛍光灯一斉交換、備品修理等に対応してくれる方はいらっしゃると思う。 ・地域づくり協議会、バトロール隊の方と学校の連携は地域にとって欠かせないもの。朝の見守りや行事におけるサポート(駐車場整理等)は本当にありがたい。 ・様々なところで地域の方に子どもたちの安全について協力をいただいているが、子どもたちが学校に安全に行けているということや、保護者やPTAにもPRし、普段から地域ぐるみで子どもたちを見守っていることを実感できるようにしてほしい。 ・地域コーディネーターはうまく活用されているのか。今年は、ボランティアへの要請はなかったが、ボランティアの高齢化が問題。今、企業の定年が65〜70歳の時代になり、いかにしてメンバーを増やすか。 ・学習支援ボランティアについて、協力者を集める手順を確立する必要がある。地域コーディネーターを活用して、ルールを構築しては。	・神戸中学校区合同の学校運営協議会の継続開催と連携活動の具現化する。 ・PTAとの連携した学校美化環境整備を継続し、協力活動を充実させる。 ・夏季休業中のラジオ体操とポスターコンクールを来年度も実施し、バザーについては用品回収方法を検討し、効率的実施に努める。 ・状況に応じた学習支援ボランティア活動を推進する。 ・ボランティアへの連絡体制を構築し、地域コーディネーターを活用する。。
	・職員に向けて非認知能力に関する研修を行う。 ・全学年に非認知能力に関するアンケートを行い、実態の把握を行う。 ・新入生に向けて、非認知能力に関するパンフレットの配布を行う。 ・その育成に関わる図書の紹介を行い、図書室にも導入する。 ・教員による図書の読み聞かせを学期に一度行う。	○1学期に非認知能力に関する児童アンケートを行い、河曲小学校の児童の実態を把握した。 ○神戸中学校区夏季研修会にて、非認知能力に関する各校の実態を報告し、中学校区としての強みと弱みを把握した。 ○低学年では読み聞かせボランティアを活用した絵本の読み聞かせを実施。中高学年では教員による読み聞かせを行った。	・中学校区での学校運営協議会において、非認知能力の話を聞かせていただいた。すごく勉強になった。児童、保護者へもぜひ機会をもって広げてほしい。 ・言葉としては新しい言葉だが、やっていることは地道な活動である。まずは「あいさつ」から。 ・子どもたちは大人をよく見ているので、「子どもたちのあいさつが少ない」という前に大人(先生・保護者・地域の方)があいさつを交わすことを見せて教えていく事が大事。あいさつを交わすことは気落ちのよいものと感じてほしい。あいさつをきっかけに繋がることができ、安心や喜びを感じ、子ども心の成長にもなると思う。11月に講演を聴講して「来た時よりも美しく、よい状態で次の人へ渡す」という言葉を、子どもたちにも知ってほしい。 ・非認知能力は経験が最も重要と考えるため、あらゆる側面での経験を児童たちに積み重ねてあげてほしい。 ・実態を把握してとあるが、その結果どうだったのか。課題、問題が顕著化したのであれば、それをどうすればよいのかが問題であると思う。集団生活、あいさつのできない子、言葉づかひのできない子等、具体的な部分が欠けている。 ・読み聞かせは本を読むのが好きでない子も抵抗が少なく取り組めると思うので良いと思う。	・鈴鹿市が特に力を入れている4つの能力「やりぬく力」「自制心」「自己肯定感」「社会性」を中心に伸ばしていく。 ・保護者や地域に向けて非認知能力の実態を啓発し、学校と家庭と地域が一体となって能力の育成にかかわっていききたい。 ・読書や絵本の読み聞かせは引き続き行い、非認知能力の育成に努める。
集 団 づ く り	○人権感覚を養う授業実践の推進 ・道徳、人権学習の授業公開を全学年で実施する。その際には、本校として大事にしている取組(参観の観点等)を学年通信で発信する。 ・学級の仲間として認め合えるための取組として、「すくすく話」を各学級で実施し、障がいのある児童への理解を深める。 ・多文化共生の授業実践を行い、外国につながる児童を視野に入れた仲間づくりを推進する。 ・保護者アンケート(安心して学ぶことができる内容項目)で、「はい」の割合を90%以上を目指す。 ・児童アンケートの「学校へ行くのは楽しいと思う」の項目で「当てはまる」の割合90パーセント以上を目指す。 ○教職員自身の人権感覚を磨き、学級の集団づくりを実践する力を高めるための研修の推進 ・「見つめる子」を中心としたレポート研修を行い、学級の実態や集団づくりの実践の交流を行う。 ・鈴鹿市内内外の人権教育の研修に積極的に参加する。 ・教職員間での情報共有を密にする。	○授業参観で人権の授業を全学年が実施した。保護者への啓発にもつながった。 ○人権の授業に取り組む際、学校からの発信だけでなく保護者にも協力してもらい、保護者と学校が人権について一緒に考えることができた。 ○年度が替わってできるだけ早い時期に「すくすく話」の時間をとったことで、児童理解が進んだ。 ○「すくすく話」を行った後、感想や振り返りを書かせることで、もう一度児童に考えさせ、理解を深めることができた。また、ぬくたいフェスタに参加し、様々な人と交流することができた。 ○運動会ではスペイン語の「オラ」の歌でダンスを行い、世界の文化に親しむことができた。 ○2学期授業参観後にレッツトークかわのを実施し、外国人保護者だけでなく全保護者に声掛けをして、教職員、保護者、子どもと一緒に多文化共生について考えたり経験したりすることができた。また、いろいろな国のお茶を飲みながら、保護者と学校がつながる機会をもつことができた。 ○人権集会を行い、3年生と6年生が、人権教育センター訪問や人権学習、そこで学んできたことや考えたことについて全校に向けて発信することができた。 ○6年生は人権フォーラムに向けてクラスでの行動を振り返るなど人権学習を行い、それを全校に発信することができた。 ○人権集会を行い、振り返りを行うだけでなく、通信を通して家庭へも発信することができた。 ○「お子様は、友達の良い面や弱みを出して、思いを伝え合えるような話し合い活動を積極的に」 ○校内研修やレポート研修、オンライン研修などを活用し、人権感覚を磨く研修に積極的に取り組んだ。 ▲編入児童が多く、文化の違いや、宗教の違いから対応について手探り状態ではある。人権課題について授業の中だけでなく、日常的に子ども達が関わり合っているかどうか丁寧に取り組みを続けていく必要がある。	・授業や授業参観を通して人権を考える機会があるのはよい機会なので、親子で気付きを得られると思う。来年度以降も人権について考える機会を設けて振り返り、感覚を養ってほしい。 ・人権学習や多文化共生の取組は積極的に行っていると思う。ただ、集団登校時に遅れて登校する多国籍児童がやや多いと思う。 ・時間やルールを守る教育も必要だと考える。 ・保護者アンケートでの「お子様は友だちの気持ちを考えて行動していますか、」の質問に大多数が「はい(どちらかといえば、はい)」と回答していた。河曲小学校は、人権に対して児童が高い意識をもっていると感じ、うれしく思う。これは、子どもだけでなく大人が特に意識をもたなければと思う。河曲地区は外国籍の方も多く住んでいる地域なので、子供らの高い人権意識をもっと地域全体に広めていってもらえたらと思う。 ・保護者への「お子さまは友だちの気持ちを考えて行動しているか」の質問で、肯定的な回答が92%だったが、残り8%の内容が気がかりである。 ・子どもたちが外国の文化などに対してとても興味をもっているように感じる。人権学習に対しても、楽しそうに取り組んでいるように思う。 ・外国人の児童が多いと思うので、運動会のダンスやレッツトークかわのでの多文化共生の取組はよい交流になったと思う。 ・集団づくりというテーマの中で、集団生活のルールについてどのように指導しているのか。人権学習は重要なことであり、様々な人権問題があるが、全ては集団生活のルールから成り立っており、具体的な学習要領を作成してほしい。 ・仲間に対してリスペクトを持てるような心の成長を目指して取組を進めてほしい。特にディベートを行わせるなどの意見の交わし合いがよいと思う。 ・今、バトロール活動をしているが、まずは集団活動である朝の通学を一人での登校をなくしたい。子どもは集団の中で育つ。(子ども同士で問題に取り組む)	・人権の授業実践や授業公開は継続していき、その内容を通信などで伝え、保護者にも啓発していく。また、保護者の思いをつかむために、通信にアンケート欄を設けるなど、家での子どもたちの様子や保護者の思いをつかむ機会も作っていく。 ・すくすくの児童や外国籍の児童をつなぐ活動も継続していく。いっしょに過ごすということだけではなく、一人ひとりの特性や生活習慣など、友だちのことを知る機会もつくっていききたい。 ・集団登校の意義や基本的なルールについても日常的に伝えて意識させていく。 ・行事の取組やレッツトークかわのの内容や実施方法について検討し、子どもも大人も多文化に触れる機会をつくっていく。多文化だけでなく、特別支援教育や特別支援学級在籍児童理解につながる新たな取組についても検討していきたい。 ・年間指導計画や人権カリキュラムの確認や見直しを行い、子どもたちの実態に合わせた人権教育を行っていききたい。 ・子どもたちが自分の良い面や弱い面を出せ、思いを伝え合えるような話し合い活動を積極的に行っていく。